

[論 説]

マックス・ヴェーバー『宗教的ゲマインシャフト』草稿の

基礎的研究 (2)

——二重のテキスト問題①目次問題——

荒川 敏彦

マックス・ヴェーバーの『経済と社会』は、「二部構成神話」という総体としてのテキスト編纂問題だけでなく、その内部すなわち『法社会学』や『支配の社会学』などの各章もそれぞれテキスト問題を抱えている。本研究が対象とする『宗教』草稿も同様であり、大別すると目次問題（節区分問題）と散逸問題という二つをあげることができる。ここでは前者、すなわち目次問題を中心に検討する。

一般に目次は、単に該当ページを指示するだけではなく、テキストの構成を示し、読み手の解釈を方向づけるものでもある。もとより解釈は読者の関心によって多様であり得るが、やはり節の区切り方や節のタイトルは、読解を左右する重要な指標である。

しかし、その目次が著者本人によるものではないとしたら、読者はその目次を安易に読解の指針とするわけにはいかない。『宗教』草稿（およびその日本語訳）にも目次が付されているが、それはヴェーバーによるものと言えるだろうか。そうでないとなれば、そこにある問題を確認する必要があるだろう。

1. 目次問題

1-1. 「神話」時代の目次の信憑性——9つの問題点

まずは『宗教』草稿の全体構成と、テキストの性格を俯瞰する視点が重要である。この点は、かつて『経済と社会』の「二部構成」が前提とされていた状況から、現代ではそれが脱神話化され、テキスト群が従来のようなまとまりで認識され得なくなったという研究史の進展と関連している。ヴェーバー全集版『宗教』草稿巻 (MWG I/22-2) の編者ハンス・キッペンベルクは、目次問題について「断片タイトルすべてがマックス・ヴェーバー自身に由来するののかという点については疑ってかからねばならない」と注意を喚起している [宗教 105]⁽¹⁾。

では具体的に、どのような点で目次が問題なのだろうか。全集版の論点整理を参考に、二部構成神話時代における『宗教』草稿の目次問題を概観してみよう [宗教 105-9]⁽²⁾。

まず、目次はどうなっていたのだろうか。ここで『経済と社会』の〈旧稿〉の性格を想起しておくことは重要である。〈旧稿〉のテキスト群はヴェーバーによって完成されていない草稿であり、マリアンネによって『経済と社会』として出版されるときには、著者は

(1) 文献注の書式は、先の拙稿 [荒川 2024: 19] に準じる。

(2) ここは全集版の「編者報告への補遺」(Anhang zum Editorischen Bericht) の部分。

すでに故人になっていた。そこで、ヴェーバー没後に妻マリアンネらが、『社会経済学綱要』の中のマックス・ヴェーバーの分担部分の遺稿を編んで、単独での出版を企画したのであった。その入稿後に出版者のオスカー・ジーベックが編者マリアンネに送った「目次の見出し語的な確認書」(以下「確認目次」)がここでの問題である。

というのも、この校正段階での「確認目次」と実際に刊行された「刊行目次」とにズレがあるからである。ヴェーバー没後の遺稿の出版という経緯からすれば当然、このズレは編者(編者マリアンネ・ヴェーバーないし協力者メルヒオール・パリュイ)の校正に依拠したものと考えられる。『宗教』草稿初版の目次問題は、従来とは異なる視点でテキストを解釈する基礎であるから、以下に両者の目次を比較してみたい[宗教 106]〈図表 2-1〉。

〈図表 2-1〉

出版社から編者マリアンネへの「確認目次」	「刊行目次」
宗教社会学 ⁽³⁾	宗教社会学(宗教的ゲマインシャフト関係形成の諸類型 ⁽⁴⁾)
1. — — ⁽⁵⁾	1 節 ⁽⁶⁾ 諸宗教の成立。 ⁽⁷⁾
2. 呪術 ⁽⁸⁾ , 祭司	2 節 呪術師—祭司。 ⁽⁹⁾
3. 神概念, 倫理, タブー ⁽¹⁰⁾	3 節 神概念。宗教的倫理。タブー。 ⁽¹¹⁾
4. 「預言者」	4 節 「預言者」。
5. 教団	5 節 教団。
6. 聖。知, 説教, 司牧 ⁽¹²⁾	6 節 聖なる知。説教。司牧。 ⁽¹³⁾
7. 諸身分および諸階級と宗教 ⁽¹⁴⁾	7 節 諸身分, 諸階級と宗教。 ⁽¹⁵⁾
8. 神義論 ⁽¹⁶⁾	8 節 神義論の問題。 ⁽¹⁷⁾
9. 救済と再生 ⁽¹⁸⁾	9 節 救済と再生。
10. 救済方法 ⁽¹⁹⁾	10 節 救済方法と生活態度へのその影響。 ⁽²⁰⁾
11. 宗教的倫理と「現世」 ⁽²¹⁾	11 節 宗教的倫理と「現世」。
12. 文化宗教と現世(未完) ⁽²²⁾	12 節 文化諸宗教と「現世」。 ⁽²³⁾

(3) Religionssoziologie

(4) Typen religilöser Vergemeinschaftung.

(5) 棒線のみ。ただしその棒線も一本線ではない。

(6) §記号。確認目次は数字だけだった。

(7) Die Entstehung der Religionen. この節タイトルが追加された。Religion は複数形。なお、以下すべての節タイトルについて確認目次にピリオドはなく、刊行目次にはピリオドが追加されている。

(8) Zauber

(9) Zauberer - Priester. カンマの区切りがハイフンにされ、確認目次の「呪術」が「呪術師」にされた。

(10) Gottesbegriff, Ethik, Tabu

(11) Gottesbegriff, Religiöse Ethik. Tabu. 区切りはすべてカンマではなく、ピリオドにされた。

(12) Heil. Wissen, Predigt, Seelsorge

(13) Heiliges Wissen. Predigt. Seelsorge. 確認目次では「聖」と「知」が分割されていたが、刊行目次では大きく変更され「聖なる知」とされた。

(14) Stände und Klassen u. Religion

(15) Stände, Klassen und Religion. 確認目次の und と u. の使い分けが、カンマと und に修正された。

この確認目次について全集版編者は、オスカー・ジーベックからマリアンネ・ヴェーバーに送られた手紙（1921年3月29日付）に由来するという以上の特別なことは述べていない。果たしてこれらの節の表題はヴェーバー自身に由来するのだろうか。これについては全集版も懐疑的である。また「目次」に惑わされず、ヴェーバーが『宗教』草稿の冒頭で述べた理解社会学宣言のラインに沿って本文を読むという本研究の方針によるなら、どちらの目次も内容と乖離している部分のあることを等閑にするわけにはいかない。その詳細は後に述べるとして、まずは確認目次と刊行目次の両者を比較し、問題を整理していこう。さしあたり以下の9つの問題点をあげておく。

第一に、目次というよりもさらに一段上の階梯だが、両者の「章」のタイトルに異同がある。「宗教社会学」というメイン・タイトルは両者に共通しているが、確認目次にはなかったカッコ書きの「宗教的ゲマインシャフト関係形成の諸類型」という部分が刊行目次に追加されている。これは編者によって付加されたものだろう。もしヴェーバー自身が原稿にタイトルを付していたのであれば、確認目次の段階ですでにその名前があると考えられるからだ。そのため全集版は、この章の副題を放棄している⁽²⁴⁾。

第二に、確認目次が数字だけなのに対し、刊行目次には章記号が付いている。これは『社会経済学綱要』の一部として出版する際に、体裁を整える都合上から当然の措置であって、仮にヴェーバー自身が出版を企図したとしても同様にしたであろう。この点は、編者の付加なのか出版社による付加なのか判断できない。ただし、机の上か書類棚か不明だが、著者没後に遺された遺稿の束を順序立てて配列することは、じつは簡単なことではない。その作業の過程で、編者による順序の入れ替えなどがあったのかどうかまでは不明である。いずれにせよ、すでに確認目次の段階で番号が振られていた。

第三に、節見出しがテキストのどの段落からどの段落までなのか、言い換えればどこで節と節とが区分されるのかが正確には分からないという問題がある。ここでは省略するが、刊行後の『経済と社会』には見出しの下位の階梯として小見出しが付されており、どこか

(16) Theodizee

(17) Das Problem der Theodizee.

(18) Erlösung und Wiedergeburt

(19) Erlösungswege

(20) Die Erlösungswege und ihr Einfluß auf die Lebensführung.

(21) Religiöse Ethik und „Welt“ ここでは定冠詞なしのカッコ付き „Welt“

(22) Die Kulturreligion und die Welt (Unvollendet) 文化宗教の Religion は単数。この確認目次では、『宗教』草稿が「未完」であることが目次に明記されていた。ここでは定冠詞付きのカッコなし die Welt

(23) Die Kulturreligionen und die „Welt“. 定冠詞付きかつカッコあり die „Welt“ とされた。また文化宗教の Religion が複数とされた。

(24) 全集版は「宗教社会学」という名称も放棄した。マリアンネ等の付加した副題は、内容からすれば、「1914年構成表」の「宗教的ゲマインシャフト」というタイトルに関連づけたと見られる点や、Vergemeinschaftung という関係形成の動的側面に着目している点などは評価してよいであろう。

なお『経済と社会』は、第3版まで初版と同じタイトルであったが、ヨハネス・ヴィンケルマンが編集した第4版（1956）で主と副が入れ替えられ、Typen religiöser Vergemeinschaftung (Religionssoziologie) という章タイトルになった。これは、初版の刊行の際に編者マリアンネらが追加したと思われる文言が、メインのタイトルになることを意味した。しかしその後、同じくヴィンケルマン編の第5版（1972）では元に戻され、Religionssoziologie (Typen religiöser Vergemeinschaftung) となっている。

らどこまでが当該小見出しなのかといった問題が発生する。節の表題だけでなく、項区分の問題もあるのだ。もっともこれは『宗教』草稿だけの問題ではなく、——後になってヴェーバーの手書き原稿が発見された『法社会学』を除き——(旧稿)すべての章に発生している問題である。これについては、テキストを丹念に解釈していく他はないであろう。

第四に、これは内容上きわめて大きな問題であるが、第1節のタイトルの付加である。確認目次では第1節は数字のみで、内容は空白であった。それに対して刊行目次では「1節 諸宗教の成立」となっている(それが現行版に至る)。これはヴェーバー自身によるものではなく、明らかに編者による節タイトルである。しかも問題なことに、このタイトルの内容はヴェーバーの理解社会学的方法への配慮がなく、読者の視点をその筋から逸らせる作用をもっている。これは単にマリアンネやパリュイによる「誤編纂」という以上に、編者マリアンネや協力者パリュイら20世紀転換期のドイツの知識人における宗教意識の問題、および宗教研究史の問題につながっていると見るべきだろう。それは「宗教」がいかなる形式で理解されていたのか、そしてヴェーバーの社会学的概念構成がそれをいかに対象化したのかという問題である。だがその検討は後の検討に譲ろう。ここでは目次がヴェーバー自身によるものでも、出版者によるものでもなく、『経済と社会』編者によるものだということを確認して先に進もう。

第五に、本文テキストでは「祭司」「預言者」「平信徒」という「宗教倫理の体系化と合理化」を推し進める宗教的ゲマインシャフト行為の三つの担い手の(拮抗と協働の)緊張に満ちた相互関係が、目次からは見えてこないという問題である。ヴェーバーのテキストでは(現行版の)2節から6節、7節にかけて、祭司、預言者、平信徒の三者の相互関係が繰り返し強調されている[宗教 160-161=43; 177=63; 194=82; 201=90; 218=106; 265=152]。それにもかかわらず、確認目次と刊行目次のいずれからも三者の相互関係が読み取れないというのは、少なくとも親切的な目次ではない[宗教 107]⁽²⁵⁾。

第六に、この三者関係についてヴェーバーは「われわれはここから、祭司、預言者と祭司でない人びととの相互関係をより詳細に(näher)論究しなければならない」[宗教 194=82]と述べている。それにもかかわらず、最終的に刊行された刊行目次で、それら三者の相互関係を論じていると目次から読み取れる部分は「第5節 教団」であり、『経済と社会』初版でわずか5ページに過ぎなかった[WuG¹ 1922: 257-261]。これを短いと取るか、十分と取るかは見方によるだろう。全集版編者は「奇妙に短い」という見解を示している[宗教 107]。たしかに、ページ数としてみれば明らかに他の節に比べて短すぎる。しかしその一方、『社会経済学綱要』の1ページは大きく字は小さく詰まっているので、5ページでも創文社版の日本語訳では9ページ分になり、ヴェーバーが凝縮した記述をしたと考えることも可能である。注目したいのは、この部分の記述で用いられる概念である。ここでヴェーバーは、ゲマインシャフト行為の概念をはじめ、ゲマインシャフト関係形成、ゲゼルシャフト関係形成、団体(Verband)など、『理解社会学のカテゴリー』で規定した特殊な概念群を集中的に用いているのである。概念の内実を解きほぐしながら解釈していけば、原文でわずか5ページといえども、内容的には充実した記述と理解することができる

(25) 拙稿[荒川2000]参照。ただしヴェーバーが親切的な目次を作成するかどうかは別問題である。

のではないか。そう解釈する可能性も残しておく。ただし目次問題として見たときには、祭司、預言者、平信徒の三者関係があたかも「第5節 教団」でのみ論じられていると理解されかねない目次構成は、読者をミスリードする危険をもっていると言わざるを得ない。

仮にこの節タイトルがヴェーバー以外の編者らによるものであった場合、この本文内容との不一致は、社会階層と宗教性との緊張を論じるヴェーバーの視点が、出版者も含め編者たちに理解されていなかったことの証しとなりうる。社会階層の特性において宗教を理解する視点が、当時としては新しい理解の仕方であったことを示す箇所である可能性がある。他方でヴェーバー本人による節タイトルである場合には、また事情が変わってくる。どちらが「真」であるか判定しがたい以上、読み手がテキスト配列に即して解釈する上で有益な節見出し（＝解釈）を再構成する、あるいは、テキストに沿って解釈した線上であらためて短く圧縮された目次の意味を解釈することが求められよう。

第七に、全集版編者は、ヴェーバー自身が目次を作っていれば、現行版の8節から11節は「別様に（anders）まとめられている」だろうと推測している。それによれば、『意味』と『現世』との、『当為』と『存在』との乖離（Entzweiung）としての宗教に関する内的論理（eine innere Logik）によって「節区分がなされているだろう」というのである〔宗教107〕。もちろん、たとえばあの『倫理』はわずか2章で構成されており、その目次の付け方の傾向を考えれば、ヴェーバー自身による目次だからといって内容を分かりやすく表現したものになるとは限らない。ある意味で表題らしい、シンボリックな命名がされる場合も多く、『宗教』草稿の見出しについても、それと同様のシンボリックな命名がなされた可能性はある。しかし、目次が内容理解に資する指標となるという点で、この編者の意見は傾聴に値しよう。全集版でも内容理解との関わりで目次構成が問われているのである⁽²⁶⁾。

第八として、明らかな「テキストの散逸」が見られる部分の目次をどうするかの問題がある。具体的には、全集版編者も指摘するように、現行版第12節は「突然始まり、突然終わる」〔宗教107〕。第12節の終わり方は、未完なのか散逸したのか不明であるが、始まり方は明らかに問題である。すなわち「世俗順応的という意味での第三のもの」として、タルムードのユダヤ教があげられているのだが〔宗教414=304〕、いきなり「第三」から始まり、「第一」「第二」が欠落しているのである。しかし現行版では、第11節から続けてさりと——欠落可能性の註もつけずに——「第12節」としている。もちろん遺稿であるから、実際の事情は不明である。第一と第二の部分ははまだヴェーバーの頭の中であって文章化はされていなかった、つまりテキストは元々存在しておらず、したがって散逸とは言えないということも想定できる。しかし散逸であろうとなかろうと、勝手に数字を飛ばしていきなり「第14節」とするわけにもいかない——間にどんなテキストがあったのか／あるはずであったのか確定できないのだから——のだが、テキスト欠落問題があることだけは確認しておきたい。この「第三の宗教」問題は、『世界宗教の経済倫理』と密接に関わる内容でもあるので、後にあらためて検討することにした（→次号：散逸問題）。

第九に、全集版では編者の補遺でも本文での編者註でも不問にされているが、初版から

(26) 全集版が出版される前の論文だが、同一箇所の目次問題（節区分問題）を扱ったものとして〔荒川2000〕など。

現行版までずっと、第7節の途中にアスタリスク記号が挿入されていたのである（冒頭から63段目と64段目の間 [宗教 234=120]）⁽²⁷⁾。しかし、全集版ではその意味不明な記号は取り払われ、記号があったことのみ編註で言及されているにすぎない。

しかも問題は、全集版による段落改編に発展する。全集版では、アスタリスクを削除するだけでなく、段落まで消してしまったのである。すなわち、『経済と社会』の初版から第5版 [WuG⁵: 291] まで、このアスタリスクを境に、行頭を1文字下げた段落（パラグラフ）が切られていた。だが全集版では、そこに1行の空白を挟んだだけで、冒頭を1文字下げた形式での段落は抹消され、ひとつの段落へと連結されてしまった [宗教 234]。この措置について、全集版は改訂の根拠も、それどころか改訂したことすらも語っていないので、段落抹消の正当性を判断することができない⁽²⁸⁾。

このアスタリスク問題は、内容が官僚層と宗教性に関わる、近代社会における宗教性との関連という重要なテーマであるから、別途あらためて検討したい（→次号：散逸問題）。ここでは官僚と宗教の問題を扱った箇所について、テキスト問題が残されているという事実を確認するとどめておく。

1-2. 解釈としての内容編成に向けて

さて、このように目次を具体的に検討してみると、これまでそれに従って内容を理解し、そして全集版も基本的にはテキスト上でその区分を採用している「刊行目次」は、予想以上に問題の多い構成だといわざるをえない。

しかし、だからといって、道標なしで済ませるのは読解に不便だろう。ヴェーバーのテキスト、しかも〈旧稿〉のような浩瀚なテキストを、節区分もなしにズラズラと読まねばならないほどの困難はない。当然、何らかの区分、具体的には新たな目次「案」を構成する作業が要請されるだろう。

ここで「目次」の典拠として真っ先に思い浮かぶのは、全集版が〈旧稿〉の構成として依拠した「1914年構成表」であろう。そこでは、「5. 宗教的諸ゲマインシャフト。諸宗教の階級的制約性；文化諸宗教と経済心術」という内容が示されていた。〈表1-2〉から該当部分をあらためて抜粋すると、以下のものであった。

5. Religiöse Gemeinschaften.
Klassenbedingtheit der Religionen; Kulturreligionen
und Wirtschaftsgesinnung.

この内容区分を『宗教』草稿テキストに採用することの是非について、全集版は確定的なことを述べていない。

(27) 日本語訳『宗教』草稿ではその痕跡は消されていて、分からない。

(28) 本論文では、内容から判断して、従来の『経済と社会』で踏襲されてきたとおり、アスタリスクでいったん段落を切る形式で解釈を進めたい。形式的にも、手稿が失われた今となっては、初版刊行時の出版社や編者によるアスタリスク挿入の判断を抹消してしまうのではなく、問題として残しておく方がよいと思われるからである。

ただ、先に述べたように、「1914年構成表」のこの箇所は、解釈が分かれることに注意したい。ここでは、2つの解釈の可能性について検討しておこう。

まず仮に、書かれた3行をそれぞれ区分と見て、「宗教的諸ゲマインシャフト」「諸宗教の階級的制約性」「文化宗教と経済心術」の三部構成と理解してみよう。その場合、たしかに「諸宗教の階級的制約性」という内容は、たとえば刊行目次の「第7節 諸身分、諸階級と宗教」などが該当するであろう。では順序からして、「宗教的諸ゲマインシャフト」は第1節から第6節だろうか？ それは刊行目次が「諸宗教の成立」としたのと似た誤りを犯してはいないだろうか？ この場合の「諸ゲマインシャフト」とは何を意味するのだろうか？ この3区分では、「祭司」「預言者」「平信徒」の相互制約関係が隠されてしまっただろう。

では、「宗教的諸ゲマインシャフト」を全体の章タイトルとして、「諸宗教の階級的制約性」「文化宗教と経済心術」の二部構成とする区分ではどうだろう。となると、確認目次で空白であったテキスト冒頭部分も「諸宗教の階級的制約性」に含まれてしまうが、記述の内容を考えるとそうは言い難い。こうしてみると、「1914年構成表」をそのままテキストの「目次」として考^えて^しま^うことはできそうにない。そもそもこの浩瀚な章を二つに区分するのみでは、目次としては不十分と言わざるを得ない。

全集版の編者もまた、そもそもの節区分がどの程度までヴェーバー自身によるのかという信憑性を検討した結果、その最終的な結論として、「表題が1913年の遺稿テキストに由来するのか、それとも後に挿入されたものなのかの決定はなされない」と述べるにとどまっている〔宗教109〕。つまり、よく分からないということだ。おそらく問題は、最初の「確認目次」の信憑性にかかっている。だが、それが何に由来するのかも、新資料の発見がないかぎり結局不明なままである。

目次を構成するための手がかりとなりえた資料は、「確認目次」「刊行目次」「1914年構成表」の3つあった。しかしいずれも『宗教』草稿の内容理解を助ける目次としては不十分といわざるをえない。したがって、ヴェーバー本人の資料にもとづく「真正な目次」の再現がない以上（自筆原稿など新たな資料の発見などが無い限り）、テキスト解釈をとおして内容編成を考えることが重要となってくる。

1-3. 英訳目次とその問題（フィショフ版目次）

ここまで、目次問題が大きな解釈問題であることを見てきた。目次は、草稿として残されたテキストの解釈に他ならない。現行版目次に対案を示しているのは、管見の限りでは、エフライム・フィショフ（Ephraim Fischhoff）による英訳『宗教社会学（The Sociology of Religion）』（1963）、金井新二による代替案（1991）、横田理博による代替案（2000）、中野敏男による代替案（2020）である。はじめにドイツ語版（第5版）と英訳版の目次を比較してみよう⁽²⁹⁾〈表2-2〉。

(29) フィショフによる英訳の細目は省略し、大きな見出しのみをあげておく。この英訳は『経済と社会』第4版を底本としている〔Fischhoff 1963: xxvii〕。金井版は第3水準もあるがここでは省く。横田版は第2水準までである。中野版はテキストの全段落について詳細な見出しを掲げている。詳細目次はそちらを参照。なお、各節がどこからどこまでかという節範囲も問題だが、ここでは主として各版の節タイトルと内的構造区分に注目しておく。

〈表 2-2〉

WuG 第 5 版目次 (刊行目次)	(フィショフ編) 英訳目次 (1963)
1 節 諸宗教の成立。	1 節 諸宗教の成立 ⁽³⁰⁾
2 節 呪術師－祭司。	2 節 神々, 呪術師と祭司
3 節 神概念。宗教的倫理。タブー。	3 節 神概念, 宗教倫理, タブー
4 節 「預言者」。	4 節 預言者
5 節 教団。	5 節 宗教集団 ⁽³¹⁾ , 説教, 司牧
6 節 聖なる知。説教。司牧。	
7 節 諸身分, 諸階級と宗教。	6 節 カースト, 身分, 階級, 宗教 ⁽³²⁾
	7 節 非特権階級の宗教
	8 節 主知主義, 知識人, および宗教史 ⁽³³⁾
8 節 神義論の問題。	9 節 神義論, 救済, 再生 ⁽³⁴⁾
9 節 救済と再生。	
10 節 救済方法と生活態度へのその影響。	10 節 救済へのさまざまな道 ⁽³⁵⁾
	11 節 禁欲, 神秘主義, 救済宗教 ⁽³⁶⁾
	12 節 救済論と救済類型 ⁽³⁷⁾
11 節 宗教的倫理と「現世」。	13 節 宗教倫理, 現世秩序, 文化 ⁽³⁸⁾
	14 節 政治, 経済, 性, 芸術に対する宗教の関係
12 節 文化諸宗教と「現世」。	15 節 ユダヤ教, キリスト教と社会—経済的秩序 ⁽³⁹⁾
	16 節 その他の世界宗教の社会的および経済的秩序に対する態度 ⁽⁴⁰⁾

翻訳において底本の構成や段落, 文を厳密には重視せずに自由に訳す傾向のある英訳の例に漏れず, この英訳『宗教社会学』も, 大胆に構成と目次を変更している。まったく偶然の結果として, その目次は底本のテキスト問題に発する目次問題への一石となった。とはいえフィショフ版英訳に, 何らかの一貫した視点で全体を再構成しようという構成的な

(30) The Rise of Religions. ここでは Religion は複数。なおドイツ語原文も複数 (Die Entstehung der Religionen)。

(31) Religious Congregation. ドイツ語原文の 5 節と 6 節が一つの節に統合された。

(32) Castes, Estates, Classes, and Religion. この Religion も単数。カースト概念が節タイトルにされた。原文では「諸身分, 諸階級と宗教」だった 7 節を 3 つの節に分割している。

(33) History of Religion. この Religion は単数。この解釈はひとつの問題である。

(34) 原文の 8 節と 9 節を一つの節に統合している。

(35) 原文の 10 節「救済方法と生活態度へのその影響」を 3 つに分割した。

(36) Salvation Religion.

(37) Soteriology and Types of Salvation.

(38) Religious Ethics, the World Order, and Culture. 原文の 10 節「宗教的倫理と「現世」」を二つに分割した。

(39) Judaism, Christianity, and the Socio-Economic Order. 第 16 節では Social and Economic Order とされている。

(40) The Attitude of the Other World Religions to the Social and Economic Order. 第 15 節のタイトルと比較。the Social and Economic Order に変更した理由は不明。原文の 12 節「文化諸宗教と「現世」」を二つに分割した。

意図を読み取ることは難しい。目次の変更点はあまりに多いので、ここでは具体的な解釈上の問題をひとつだけ取り上げる。

英訳の第16節には「その他の世界宗教の社会的および経済的秩序に対する態度」というタイトルが付されている。段落の範囲としては、[171]段落⁽⁴¹⁾から末尾までが一括されているわけである（英訳 p.262f, 日本語訳 322 頁以下）。しかしこの節区分については、第一に区切り方の問題、第二に「その他の世界宗教（the Other World Religions）」という視点に示されている問題を指摘せねばならない。

第一に、区切り方の問題がある。[171]の冒頭は、このパラグラフが前段 [170] から議論を継承していることを示している。

今一つ、まったく別の意味で『現世順応的（weltangepaßt）』なのは、旧約聖書のおよびユダヤ人キリスト教徒的動機（alttestamentische und judenchristliche Motive）によって強く条件づけられた、西南アジア的一神教の継承者、すなわちイスラム教である。[宗教 432=322：下線は引用者]

「今一つ、まったく別の意味において」という記述は、それ以前の議論を前提としたものである。この [171] 以前に論じられていたのは、「現世順応的」な宗教としてのユダヤ教である。つまり [171] 以下で論じられようとしているのは、「現世順応的」な生活態度を形成するという点ではユダヤ教と同じ性質をもつが、それとは「まったく別の意味」で現世順応的な生活態度を涵養するイスラム教が以後の論点と予告されているのである。さらにその後は、「現世拒否的」な態度を涵養する原始仏教と原始キリスト教とが論じられている。

このような文脈を理解してみると、英訳版目次のようにイスラム教と原始仏教と原始キリスト教とを「その他の世界宗教」としてまとめるのはあまりに乱暴であると言わざるを得ない。そこにはイスラム教や仏教などの「アジア的宗教」を「その他」として、非ユダヤ-キリスト教を排除する視線すら感じられる。それをオリエンタリズムと言ってもよいだろう。

そのことは第二の問題、すなわち複数形で示された世界宗教（World Religions）の用語法とも関わってくる。ヴェーバーの文脈で世界宗教といえば、直ちに「世界宗教の経済倫理」シリーズが想起される。しかし、フィショフによる英訳版がそこで想定するのは、現世に対する態度など『宗教』草稿にとって主題的に重要な宗教的特性を考慮することなく、ユダヤ教とキリスト教以外を「その他」で一括りにしてしまう視点なのである。これは「ヴェーバー的」視点と言えらうか。

この宗教分類の仕方は「世界宗教」概念以前の「宗教」認識、すなわち、「ユダヤ教」「キリスト教」「イスラム教」「それ以外」という4分類による「宗教」理解よりも一層問題ではなからうか。「世界宗教 Weltreligionen」という概念は、そのようなかつての4分類把握がキリスト教中心であるとの反省を踏まえながらも、他方で「アーリア系」宗教とし

(41) 亀甲カッコは『宗教』草稿冒頭から数えての段落を示す。以下、同じ。

てインドの諸宗教に注目が集まるという事情を背景に成立してきた。もちろんそこには、民族主義の台頭に連なる当時の問題状況があるだろう。いずれにせよ、そのような「宗教」理解をめぐる思想状況が、19世紀末から20世紀初頭のドイツにあり、この概念の普及に大きく「貢献」したのがヴェーバーの「世界宗教の経済倫理」だったと指摘されている〔Masuzawa 2005, 増澤 2006〕。

世界宗教の概念に関するこの指摘は、別途検討を要する重要な論点を含んでいる。但至少なくとも、「世界宗教」概念の成立が以上のような背景を少なからずもっていたとすれば、英訳が示す「ユダヤ教とキリスト教」(第15節)と「その他の世界宗教」(第16節)という二分法は、「世界宗教」概念成立の思潮に逆行したものであり、「ヴェーバー的」というよりむしろ「前ヴェーバー的」なものと言える。この箇所をヴェーバーの記述する文脈に沿って区分するならば、宗教ごとの分類ではなく、どう表現するかはともかく、「現世順応的」か「現世拒否的」かという「現世への態度」の問題として節を立てるべきであった。

1-4. 金井編目次, 横田編目次, 中野編目次

ところで、上述したような目次の問題を正面から問い、積極的に改訂案を提示した試みはすでにある。『宗教』草稿の前半を「社会→宗教」の、後半を「宗教→社会」の規定関係として解釈した折原浩の例をはじめ⁽⁴²⁾、より詳細に目次案を提示しているのは、金井新二〔1991: 147-156〕と、横田理博〔2000: 111-114〕、そして中野敏男〔2020: 158-173, 277-281〕による目次の改訂案である。これらの研究蓄積は、目次問題が解釈に関わる論争的な問題であることの共通理解が深まりつつあることを示しているだろう。

そこで、三者の目次を現行版目次(先に示した「刊行目次」)と比較する形で確認しておこう(表2-3)。金井編目次と中野編目次は詳細なものだが、それらをすべて記すと細かすぎて構造が見えにくくなるので、ここでは両者による論理展開の解釈について、骨格のみ見ておきたい⁽⁴³⁾。英訳とこの三者を並べるだけで、いかに解釈が異なるかが明らかとなろう。

1-4-1. 冒頭部分をめぐる三者の解釈

三者に共通するのは、テキストの論理展開を顕在化させようとする姿勢である。先にも触れたように、現行版の目次はどこまでヴェーバー本人によるものなのか疑わしい部分が複数箇所ある。それに対してこれらの代替案には、それぞれに力点は異なるが、自らのテキスト解釈が鮮明に表現されている。

もう一つ共通するのは、冒頭部分の解釈の変更である。すでに本稿では「確認目次」で空白であった冒頭部が、確認目次から刊行目次への途上で「諸宗教の成立」というタイトルになったことに触れ、この箇所が編者の解釈によるタイトルである可能性がきわめて高

(42) [折原 1988: 229-232]。ただしここでの折原の場合、節区分問題にまでは介入せず、マリアンネ・ヴィンケルマンによる節区分を踏襲している点に注意が必要である。しかしそこで示された全体構成の解釈は、説得的である。

(43) したがって金井編と中野編の目次の細目は省略するが、横田編目次は分節が少ないので漏れなく記す(他の二者と同様に第一階梯としては、A~Eの5区分である)。

〈表 2-3〉

WuG 刊行目次	金井編目次	横田編目次	中野編目次	
宗教社会学（宗教的ゲマインシャフト関係形成の諸類型）	宗教社会学（宗教的共同体関係の諸類型）	宗教社会学	宗教ゲマインシャフト	
1 節 諸宗教の成立	第 1 節 宗教の合理的発展	A 「呪術」から「礼拝」への展開	第 1 節 宗教領域の分立化	
2 節 呪術師－祭司	第 2 節 祭司（合理化の担い手 1）	B 宗教形成への祭司と預言者の関与 ①祭司	第 2 節 祭司と宗教倫理	
3 節 神概念。宗教的倫理。タブー。				
4 節 「預言者」	第 3 節 預言者（合理化の担い手 2）	②預言者	第 3 節 預言者	
5 節 教団	第 4 節 祭司および預言者と教団形成		③教団	第 4 節 教団
6 節 聖なる知。説教。司牧。				
7 節 諸身分、諸階級と宗教	第 5 節 信徒（合理化の担い手 3）	C 宗教形成への平信徒の関与 ①社会的な生活態度から宗教形態への影響 a 農民 b 武人 c 官吏 d 市民 e 貴族と奴隷	第 5 節 平信徒－身分、階級	
	第 6 節 主知主義による宗教の合理的発展		第 6 節 知性主義と神義論・救済	
8 節 神義論の問題	第 7 節 神義論	②知性主義 ③神義論	第 7 節 救済方法と生活態度	
9 節 救済と再生	第 8 節 救済類型論——救済方法と生活態度			
10 節 救済方法と生活態度へのその影響		D 宗教形態から社会的な生活態度への影響 ①救済願望の転轍 ②規範の質 ③規範の方向 ④恩寵の質		
11 節 宗教的倫理と「現世」	第 9 節 宗教倫理と現世——宗教的現世拒否の諸方向	E 宗教倫理と世俗との間の緊張 ①「心意倫理」への展開 ②世俗の諸領域との緊張 ③各宗教の世俗への関係の仕方	第 8 節 宗教倫理と現世	
12 節 文化諸宗教と「現世」	第 10 節 現世順応的諸宗教と現世拒否的諸宗教		第 9 節 文化諸宗教と現世	

いことを論じた。つまりこの部分は、しばしば宗教進化論的な議論を巻き込みつつ、解釈論争に発展する内容となっているのである。

現行版では「諸宗教の成立」として、あたかもキリスト教や仏教やゾロアスター教などの諸宗教について、それぞれの宗教史的成立を論じているかのような表題である。こうした現行版の目次が提示する解釈に、金井と横田と中野は当然批判的である。

ヴェーバーのモチーフを「宗教の合理的発展」（の社会学的類型論叙述）と見る立場から、金井は、「第 1 節の内容は、宗教の合理的発展（合理化プロセス）の展望である。すなわち、呪術から普遍主義の一神教へ。したがって、表題は『宗教の合理的発展』ないしそれと類似のものとするべきである」と述べ、「現行『諸宗教の成立』はこの内容と合致せず、誤り」と断じている⁽⁴⁴⁾。金井編目次では、呪術的宗教性ではなく呪術を出発点に、そこから普

遍主義的一神教への過程が読みとられていることが分かる。ヴェーバーの言い方を借りるなら、「日常的」な行為としての呪術から普遍主義的一神教への合理化過程を読み取ったということである。ただそこに、宗教進化論の影が見え隠れしてしまうとすれば問題が残るだろう。

「呪術から普遍主義的一神教へ」という「合理化プロセス」を重視する金井に対して、横田は、「呪術」から「礼拝」への「展開」に力点を置いて解釈している。横田編目次は、人間が神に働きかける「神への強制 (Gotteszwang)」としての「呪術」から、人間がひたすら神に奉仕する「神奉仕 (Gottesdienst)」としての「礼拝」への「展開」を提示する。ここで呪術と対比されているのは、金井編が述べる普遍主義的一神教ではなく、礼拝というカテゴリーである。ヴェーバーのカテゴリーからすれば、「呪術」と対比されるのは「宗教」であり、前者を神強制、後者が神礼拝 (神奉仕) とされているが [宗教 157=39]、横田の解釈は、宗教領域の合理化 (金井編目次) の内実をさらに「神概念の合理的体系化」と捉え、宗教的行為が呪術的形式から礼拝的形式へと「展開」する点に注意が向けられている。

これらの解釈に対して、中野は理解社会学の方法を一貫させる観点から、第1節を「宗教領域の分立化」と解釈する。精霊、霊魂、超自然的な力、象徴機構、神々、パンテオン、一神教などの宗教的な「諸観念の生成の考察をもってヴェーバーが確認しているのは、理解可能な形で『宗教領域』が日常の思考から分離し、やがて相対的には自立した観念世界を構成するようになっていくということ」だと解釈するからである⁽⁴⁵⁾。宗教領域がそれとして分立化し、自立化する過程として解釈する見方は、後述するように冒頭部分を後続の議論にしっかりと接続する理論的道筋を提示した。

合理化プロセスとして解釈する金井案、行為論的に解釈する横田案、理解社会学として解釈する中野案。こうした特徴をもつ三案について、もう少し踏み込んで検討してみよう。

1-4-2. 「合理化の担い手」論——金井編目次の特徴

金井編目次に見るべき重要な特徴を、もう一点あげておきたい。それは祭司、預言者、信徒という宗教的視点からの三階層を、それぞれ「合理化の担い手」として明記する点である。金井は現行版の目次編成を次のように批判する。

私見では、ウェーバーの本文の内容はけっして読みやすいものではないが、その大きな骨格はきわめて明快である。だが、現行ヴィンケルマン版は、逆にそれを分かりにくくしてしまっている。その誤りの最大のものは、ウェーバーがくり返し定式的に述べている合理化プロセスの3つの担い手 (祭司、預言者、信徒) が不明瞭にされていることである。⁽⁴⁶⁾

(44) [金井 1991: 147]。

(45) [中野 2020: 167-168]。こうした中野の解釈は、『宗教』草稿の冒頭で理解社会学宣言をしたことを重視し、理解社会学の視点でこのテキストを読み返そうとする本研究の方向と同一である。

(46) [金井 1991: 146]。

だからこそ、目次案の積極的提示に際して、金井は目次について「第2節から第5節は、根本的には合理的発展（合理化プロセス）の『担い手』論である。ゆえに、表題はそれを明示する簡潔なものが相応しい⁽⁴⁷⁾」と主張するのである。

金井のこの指摘は重要である。先に述べたように、ヴェーバーは『宗教』草稿で祭司と預言者と平信徒の三者関係をくり返し論じているが、この問題構成を読みとるかどうかで、テキスト解釈が大きく異なってしまうからだ。金井編の最大の特徴は、実は合理化プロセスの点よりも、この三者関係を目次で分かりやすく示したことにあるとすら言える。

注意したいのは、それが三者の緊張関係として捉えられるべきだということである。金井は「合理化プロセス」という解釈的立場から、第2節を「祭司（合理化の担い手1）」、第3節を「預言者（合理化の担い手2）」、第5節を「信徒（合理化の担い手3）」と位置づける。これによって、三者がそれぞれ合理化の担い手であることが明瞭になる。しかしこの点を踏まえてさらに、三者が独立して論じ分けられているのではなく、この三者が相互関係にあるという点が重要なのである。残念ながら本文の説明を見る限り、金井は「担い手」論を明快に提示こそしたが、それら三者相互の緊張関係による宗教性のダイナミックな形成局面を、必ずしも重視してはいないように思えるのである。

他に、金井は自らの目次構成の特徴として、合理化プロセス論における「主知主義」による合理化を明快に提示する点をあげている⁽⁴⁸⁾。しかし主知主義の問題については、本論文は異なる解釈をとりたい。すなわち、主知主義もまた祭司との緊張関係如何によっていかなる宗教性を形成するか異なってくる、というヴェーバーの問題提起を重視したいのである〔宗教266=152〕。この点は後の検討に委ねることにしよう。

1-4-3. 宗教形成と生活態度への影響の相互関係論——横田編目次の特徴

横田の研究は『宗教社会学論集』全3巻と『経済と社会』の『宗教社会学』草稿とを概括し、相互の補完関係を明らかにすることで、ヴェーバーの宗教社会学研究の全体像を示そうとしたものである。『宗教社会学』草稿の節区分についても、その目的の限りで概略を再構成したものであった。

横田編目次の特徴は、担い手による宗教形成の側面（BとC）と、そうして形成された宗教形態が生活態度へと影響を及ぼす面（D）との、二面構造を明快に提示している点にある。この指摘も、テキストの全体構成を把握する上できわめて重要である。ただ、横田自身はそのことを文章によって説明しておらず、（本文および表における）目次区分の表題によって示しているにすぎない。そのため、どのような視座からこの二面性が取り出されたのか、いまいち判然としない。それについては、——横田からすれば——テキストを丹念に解釈するならば、そのような構造が自ずと取り出せるということなのであろう。

しかし横田案の最大の特徴は、〈図表2-3〉から分かるように、その区分枠の大きさにある。A～Eの5つに大きく区切り、Aはともかく、Bはマリアンネ編刊行目次の2節～6節を「宗教形成への祭司と預言者の関与」として一括りにし、Cは7節と8節を、Dは9節と10節を、Eは11節と12節をまとめる形で区分している。このような大枠で構成

(47) [金井1991:153]。

(48) [金井1991:147]。

を提示することで、ともすると細部の議論に流れがちなヴェーバーの議論の文脈を示すことができるのである。

本稿としても、テキストの構造として横田の指摘する二面構造に賛同したい。ただ、B区分を「宗教形成への祭司と預言者の関与」とし、C区分を「宗教形成への平信徒の関与」と区別してしまうと、祭司、預言者、平信徒の三者構造が見えなくなってしまうのではないか。これも表題という性質からやむを得ない面があるのだが、解釈する際には注意すべきであろう。

また、「祭司と預言者との関与」とされたB部分では、「平信徒の伝統主義」の問題が論じられており、祭司と預言者の関与として括ってしまうと解釈しにくくなる。平信徒の伝統主義との対比で、Cにあたる部分では「平信徒の合理主義」が農民層にはじまり諸階層にわたって論じられているのであって、BとCの区分にいささか疑問が残る。横田の示唆する二面構造⁽⁴⁹⁾はテキストの大きな構造を把握する上で重要なポイントであり、別途あらためて検討することにしたい。

1-4-4. 一貫した理解社会学への視点——中野編目次の特徴

中野案は、理解社会学的方法で一貫させるという方法意識が鮮明である。冒頭部分を宗教領域の宗教領域としての分立化と捉え、「これを合理的に理解可能な対象とする」考察へと進んでいくことで、祭司、預言者、平信徒という三つの担い手の関係を問い、「その極点において、他の社会科学の方法をもってはおおよそ接近しえないような理解社会学ならではの考察対象として」「知性主義」の問題を提起し、知性主義論が『宗教』草稿において神義論と宗教的救済の議論に結びつく重要な論点であることを指摘している⁽⁵⁰⁾。

現行で「第1節 諸宗教の成立」とされた冒頭の章は、従来は後段の議論とは切り離されて解釈されがちであった。もともとの確認目次でタイトルが空白だったのも、出版社およびマリアンネら編者にとって、その位置づけがよく分からなかったからではないのか。その「分からない」という解釈状況は、現在に至るまで継続していたように思われる。「諸宗教の成立」というタイトルがヴェーバー「らしくない」と、多くの読者がうすうす感じ続けてきたのではないか。それに対して中野は、理解社会学の立場から「宗教領域の分立化」として解釈することで、後段に続く理論的展開の道筋を拓いてみせたと言えるだろう。

中野は自らの目次案について、マリアンネ編（刊行目次）との違いを3点にまとめている。そのうちの一つは、冒頭の「分立化」のタイトル問題なので、残りの2つに触れておこう。

一つは、マリアンネ編の2節と3節を第2節に一括し、同じく5節と6節を第4節に一括したことである。これによって、祭司、預言者、平信徒というゲマインシャフト行為の

(49) この二面的構造については、すでに触れたように折原[1988]もまとめており、中野案でも触れられている[中野2020]。中野は次のようにまとめている。「前半部の議論は、こうした此岸から彼岸を見通した領野（この意味で宗教領域）に関わる人間たちの営みを、ゲマインシャフト行為という観点から捉えてその意味を解明的に理解するための基礎理論だということになる」[中野2020: 165-166]。この二面的構造への視点は、現代では『宗教』草稿の大枠として通説になりつつあると言えるだろう。

(50) [中野2020: 167-168]。また、祭司、預言者、平信徒の三者関係を踏まえた、神義論と主知主義との関連については、拙稿[荒川2000]も参照。

担い手に関する議論が可視化される。じつはこの区分は結果としてみれば金井案と同一なのだが、ヴェーバーの理解社会学的考察を踏まえた論拠を提示している点が中野案の特徴である。

もう一つは、マリアンネ編では7節に埋め込まれてしまっている「知性主義」論を独立させ、「神義論」の問題および「救済と再生」の議論と統合した点である。この区分は、金井案や横田案とは大きく異なる区分であり、宗教性の形成における（祭司の、ではない）平信徒の知性主義がもつ意義をテキストに即して重視し、かつその問題が神義論の問題に接続していることを重く見た区分である。知性主義と神義論の問題との連続を把握することは、テキスト解釈として重要なので、目次でそれらの連関が示されることの意義は大きい。

総じて中野案は、ヴェーバーの理解社会学的方法に一貫して注意を払い、その視点から全編を再解釈・再構成しており⁽⁵¹⁾、『宗教』草稿の冒頭でなされた理解社会学宣言を重視してテキストを再解釈しようとする本研究にとって大きな参考となる。

1-5. 小括

以上本稿では、『宗教』草稿のテキスト問題の内、目次問題を検討した。まずマリアンネ編の現行版（全集版も注意しながらそれを踏襲している）について、初版出版に至る過程での確認目次と刊行目次を比較し、編者の関与と問題点を確認した。その上で、英訳のフィショフ編目次と、金井案、横田案、中野案の目次について、それぞれの解釈上の特徴と問題について簡単に見てきた。現行版の目次に問題がある以上、テキストを解釈していくにあたり、いったん既存の「目次」を離れて独自の視点から文脈を再構成していく必要がある。フィショフ版は結果として既存の目次とは異なる目次案を示したことになるが、1963年という研究史上の制約もあって、テキスト編纂問題を踏まえた意識的な再構成というわけではない。それに対して、金井、横田、中野らが示した案は『経済と社会』のテキスト編纂問題を踏まえた再構成の提案である。

なお、本稿では触れられなかったが、節よりも下位の項（中見出し）についても、タイトルの問題、区分をどこに入れるかの問題が、節区分問題と同様に存在する。編者マリアンネと出版者のジーベックとのあいだで交わされた書簡から、そこには編者の介入が多数あると見られるのである [宗教 107-108]。

「確認目次」で空白となっていた冒頭の第1節をどう読むか。祭司・預言者・平信徒の三者関係をどのような布置連関で把握するか。主知主義（知性主義）や神義論問題をどう位置づけるか、また後に触れるがテキストの欠落をどう解釈するか。さらには、節だけでなく項の見出し（中見出し）も編者による介入があることが判明している以上、テキストはあらためて真っさらなテキストに戻して解釈しなければならない。目次問題は、テキストの解釈を具体的に進めた上で、最後にあらためて立ち戻る問題である。

さらに、『宗教』草稿にはもう一つ大きなテキスト問題がある。それが散逸問題である。（続く）

(51) 巻末には「『宗教ゲマインシャフト』パラグラフ一覧」も付されている [中野 2020: 277-281]。

〔文 献〕

※ 前拙稿 [荒川 2024] で掲載した文献は省略し、新たに参照したもののみを記す。

荒川敏彦, 2000, 「ヴェーバー宗教社会学における「神義論」の問題圏——「社会階層」および「主知主義」との関連で」『現代社会理論研究』10, 11-20。

——, 2024, 「マックス・ヴェーバー『宗教的ゲマインシャフト』草稿の基礎的研究 (1) ——Religion の定義の留保と理解社会学宣言」『千葉商大論叢』61(3), 19-42。

Fischhoff, Ephraim, 1963, Translator's Preface, in: Max Weber, *The Sociology of Religion*, introduction by Talcott Parsons with a new foreword by Ann Swidler, Beacon Press.

金井新二, 1991, 『ウェーバーの宗教理論』東京大学出版会。

横田理博, 2000, 「ウェーバー宗教社会学の概観」『電気通信大学紀要』第13号第1号 (通巻25号), 81-124。

Weber, Max, 1922, *Grundriss der Sozialökonomik*, III. Abteilung, *Wirtschaft und Gesellschaft*, Tübingen: J.C.B.Mohr (Paul Siebeck).

フィショフ編: 1963, *The Sociology of Religion*, English translation (from the fourth edition) by Ephraim Fischhoff, Beacon Press.

(2024.5.27 受稿, 2024.6.30 受理)

〔抄 録〕

本稿では、マックス・ヴェーバーの『宗教的ゲマインシャフト』草稿のテキスト問題の内、目次問題を検討した。すでに『経済と社会』の初版を出版する過程で、編者マリアンネによる目次や節区分の仕方への関与があり、そうした事情を抜きに、既存の目次に即してテキストを解釈することはできない。そこでまず、マリアンネ編のテキストについて、『経済と社会』の初版出版に至る過程で出版者のオスカー・ジーベックから編者マリアンネ送られた「確認目次」と、それに編者が手を入れて修正した「刊行目次」を比較し、編者の関与と問題点を確認した。その上で、英訳のフィショフ編目次や、金井案、横田案、中野案といった目次の代替案について比較検討し、それぞれの解釈上の特徴と問題を明らかにした。とくに金井新二、横田理博、中野敏男それぞれの目次案は、『経済と社会』のテキスト編纂問題を踏まえた再構成の具体的提案であり、その意義は大きい。